

〔書評〕

戸谷敏之著

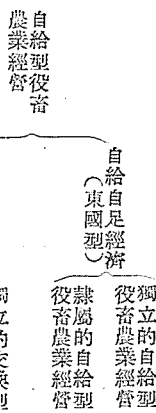
近世農業經營史論

呪わしい戦争や軍國主義による歴史學界の犠牲は大きい。中でも中世史に於て清水三男氏を、近世史に於て戸谷敏之氏を失つたことは、特に惜むべき二大損失であろう。戸谷氏の近世農業の諸問題に關する地味で堅實な優れた諸業績は、その偉大さに反して餘り一般には知られず、専門の分野に於てたゞえられてゐるに過ぎない。この隠れた業績が、今度その一部にすぎないと云え、論文集として發刊されるに至つたことは、學界のため限りない喜びである。

最近日本史に於ても、發展的な歴史の流れを類型的に理解しようとする方向が特に著しく高まつて來てゐる。例えば中世史の動向を畿内と邊境との兩類型の相違乃至關連に於て把握しようとする最近の傾向もその一つである。蓋し、複雑多様な歴史現象を考察する際、一應その兩極端を考へて類

型等に整理し理解することは、歴史の流れを理解するための有力な方法であり、中でも歴史現象とそれを生み出した社會經濟的基礎との交互關連を問題にする場合に於て、特に然りであるからであらう。

近世の農業經營に關する類型の問題を、森嘉兵衛氏に次いで更に本格的に取り上げられたのは戸谷氏である。森氏は、牛・馬や秣場の有無から近世農業經營の類型を、



と決められた。戸谷氏は、この森氏の功績を高く買いつつ、尙「逆に農業經營の性格の相違から牛・馬や秣場に對する態度が變化することも考え得る」と鋭い慎重な態度をとられる。かくて氏は、近世の東北日本と西南日本とに於ける農業經營の相違を、

より廣い視野に立ち、より妥當な技術の高  
低以下七つの基準(七項目)によつて區別  
される。それを私なりに理解して要約すれ  
ば、次表のようになる。

項目	地方	
	東北日本	西南日本
技術の高低	低(自給肥料) (農具幼稚)	高(自給肥料) (農具進歩)
勞働集約の度	低(粗放的)	高(集約的)
貨幣經濟的經營	小(自然經濟) (色彩大)	大(自然經濟) (色彩小)
身分的關係	多(名子制度) (が多い)	少(名子制度) (が少ない)
家族形態の大	大(地主) (小(子)	中間(自營單) (婚家族)
土地配分の状態	大(地主) (零(子)	細分(農) (一般民)
年貢の輕重	重(貨質上)	輕(貨質上)

かくして場所の限定をうけない東北日本

型と西南日本型との獨立した經濟概念が設定されるのである。

更に戸谷氏は、東北日本型に於て家族形態と土地配分の状態とが地主と名子を兩極として分化しているところから、これを地主經營と名子經營とに區別された。然し、名子經營はそれ自體としては獨立し得ず、名子は地主に依存しなければならなかつたであろう。従つて、零細地に雜穀を栽培する名子經營があり、又漸次自作農が増加する傾向にはあつたろうが、東北日本型の基本は、名子（下人・被官）と定備との勞働に依存する地主經營ではなかつたかと思われ、それは中世的經營で自給經濟の色彩が濃い。戸谷氏は、神奈川縣の舊名主原家の經營を分析して、それは「東北日本型地主經營に屬するが、名子主の經營よりも進んだ面を持つてゐる。まづ、奉公人が譜代でない。農繁期の調節に名子の賦役によらず日雇を用ひてゐる」(131-132頁)とされる。中世的で自給經濟の度合の強い東北日本型地主經營は、名子賦役による經營から年雇乃至日雇勞働による經營に進む性格

をもつてゐる。然しこれが、貨幣經濟Ⅱ商品生産の發達の影響をうけるときは、いはば第二次的東北日本型と西南日本型に變質するのである。戸谷氏も「東北日本型農業經營は、若し流通經濟に接觸するのが地主であるなら、經營内部の自然經濟を保存乃至擴大されてゆく。契約名子の發生と賦役の増大が結果する所以である。之に對し、流通經濟に關係するのが名子乃至奉公人の場合は、彼等の地位を向上させ、大家の支配を漸次離脱し、獨立の經營主體となり、西南日本型農業經營へ移つてゆく」(11頁)と註記して居られる。この東北日本型からいへば、第二次的東北日本型への移行はより中世的經營の強化であり農奴制の再版とも云われ、15・16世紀頃のオスト・エールベ(東ドイツ)に見られた形であり、これが名子制度をおそくまで存続せしめた所以である。

次に西南日本型に關して戸谷氏は、貨幣經濟の進展と年貢の輕重を重視し、その一般的傾向は、貨幣經濟的農業經營が進展して居り、獨立的自作農が多いが彼等は、重

い年貢と有利な市場や工業の發達不充分的なため一般に貧困であるとし、その典型を阿波國で分析して阿波型とされる。この貨幣經濟Ⅱ商品生産の發達にともなう東北日本型から西南日本型Ⅱ阿波型への發達は、名子・下人の本百姓化、經營主自身のプロレタリアート化を結果する。これは、ヴィリカチオン解體後のフランスの一部で見られた型である。然し、こうした西南日本型農業經營の一部には例外的な別の動きが見られた。戸谷氏は、攝津の西成郡等では年貢が輕く、有利な市場や各種産業の發達に恵まれ、従つて農民は富裕であり、特殊な西南日本型Ⅱ攝津型を呈するとされる。この東北日本型から攝津型への發展は、右のような條件を具備し得た一部のところに見られ、そこでは、獨立化した下人・給取を雇備する經營主の産業ブルジョア化Ⅱ小資本家が見られた。これは、イギリスの經營に比定し得よう。

以上戸谷氏の見解に基いて理解し得る近世農業經營の類型を表示すれば、

東北日本型農業經營…〔地主經營  
名子經營〕

〔西南日本型農業經營…〔阿波型〕(一般型)  
〔播津型〕(特殊型)〕

となる。かゝる類型を抽出し、それを長防二國やその他で直接資料によつて實證された戸谷氏の功績は、何と云つても見逃し得ない。然も、氏は地主・名子經營の中間的なより進んだ自作農や小作人の經營、或は勞働集約と農業技術の關連性・武藏野一家の經濟生活等を分析しておられる。何れも豊富な資料を提示した地味で堅實な名篇である。

然し、一般的に見て戸谷氏の所説には、農業經營の類型に對する歴史的發展的把握に於て、多少慎重にすぎた觀があるように思われる。具體的個別の解明に於てよりも抽象的一般論に於て特にその趣きが多い。上述に於て私はその點を若干補いながら本書を理解したところをのべたのであり、著者の意に反するところもあろう。従つて慾を云えば、氏の類型乃至それを基礎づけている社會構成に對する歴史的發展的な綜括

書評

意見をお懸きしたかつた。つまり、氏の抽出された近世農業經營の諸類型が、室町戰國乃至近世初期の如何なる政治經濟關係からどのようにして成長して來たものか、又それが其の後どのような政治經濟構造を形成して行つたか云うことについて、ある。然しそれは、基礎的研究としての氏の地味で慎重な、然も鋭い見通を暗示した業績の偉大さを疵つるものではない。氏の殘された問題は、今や藤田五郎氏等をはじめ多くの人々によつて切り開かれつゝある。

本來東北日本型經營は、室町末から戰國にかけて、商品生産の發達にともない獨立的農民(後の本百姓)を一齊的に成立させたが、封建的反動に押し切られた。然し、元祿前後より商品生産の發達に基いて再び「齊的分出をはじめる。そこには、①下人・給取を放出する貧困な本百姓・名子等の獨立化、即ち上述の阿波型經營、②下人・給取を雇傭する富裕な本百姓、特殊西南日本型(播津型)經營、③以上の中間的な本百姓、即ち上述のいわば第二次的東北型經

營、等がそれ／＼上述のような地域的政治的經濟關係に從つて分立し、②を中心としていわば第一次の近世封建制の危機が形成される。この危機は享保から天保にかけての再度の封建的反動により一應押し切られる。然し農民層の分化は引き續き、①と③からは小資本家と共に遊民層(日雇)を分出し、又漸次マニユファクチュアが起る。こゝに幕末期の危機が形成されるのである。こうした見通しに對する序曲的成果は、藤田氏の「近世における農民層の階級分化」に見られる。かゝる成果の基礎をなしたものが、一つが戸谷氏の業績である。戸谷氏もこうした成果への見通、即ち政治經濟構造の發展との相互關連における類型的農業經營史論の重要性は、充分御承知のことと思ふ。然し、それが思うにまかし得なかつたところに、戸谷氏の學問に時代的な或は時勢的な限界があつたことを感ずる。それにつけても、今日氏をして在らしめた學問的慾望の愚知が出て來るのである。たゞ、私たちとして當時の段階における氏が、當面の課題は、史料の蒐集とそれに平

行する理論の分野の發展にあるとして、地帯な基礎研究に専心し、鋭い見通を暗示しつつ、適正規模の問題にこと寄せながら、農業經營の類型を抽出し實證説明せられた貴學問的態度と業績をうけつぎ、更に發展させることこそ私たちの道であろう。

至らぬ感想を羅列して、著者の本意に満たぬところ、或は反したところがあろうと思う。著者の靈に對して寛恕あらんことをおわびし、又本書の理解に對して教示を與えられた高尾一彦氏等に深く感謝する。

(日本評論社A5・五二九頁定價五五〇圓  
昭和二四年九月二〇日發行) — 官川滿

西水政郎著

### 「日本の農業——その經濟地理學的研究」

經濟地理學の一部門としての農業地理一般に關する研究は農業區域の設定を試みたエンゲルブレヒトやウィットレツシイ、熱帯の栽植農業を研究したレオ・ヴァイベルさらにふるく「孤立國」を想定したチウネ

ンの法則等が一部に紹介せられた以外に獨立した農業に關する地理書は殆んど見られない状態であつた。けだし農業に關する地理といへば、その取扱うところ極めて廣汎であり、農業一般はもとより、自然的基礎たる地形、地質、土壤や肥料、氣候、農業經濟、農業經營、農業人口、農村社會等すべてに通じ、土壤は土壤として、農業經濟は農業經濟としての研究が既に獨立した一部門を構成し實に既に別々に發表されてきたからである。しかし地理學がもし地表におけるこれら自然人文兩様の地域的特質を取扱う特殊な綜合科學だとすれば農業地域こそ、これら二つの要素が混然と織りなされたものであり、農業地理學の研究は最も普遍的な地理學の課題を提供しているといわねばならない。殊に狭い國土を養う農業の問題は極めて主要な眼前の問題でなければならぬにも拘らず、農業を經濟地理的に概観した書物が從來あまり出版されなかつたのは一にかゝつてその領域が廣汎な爲に觀點の置き場所に困るといつた問題にあつたともいへるのではなからうか。著者

の立場はこの點からいへばその豊富にして多方面な研究の中にもなお東大學派ともいへべき景観論的立場に基礎をおいていることが注目されるのである。本書の主要構成は第二章日本農業の基本的條件、第三章耕地、第四章水田農業、第五章畑農業、第六章都市と農業、第七章山地農業の六つの章からなつてゐる。

その敘述の方法はまず第二章で日本農業の把握のし方を序論的に概観し、三章以下で地域を主とした農業の特殊性を要約し、沖積低地、台地、山地といつた自然的基礎の上にくりひろげられた日本農業の特質を作物、作付面積、反當收穫量その他あらゆる統計から明らかにしている。ことに現下開拓局等で問題にされている山地農業にあつては、これを大きく高冷地域と火山地域に二分別し、山地氣候や土壤による作物限界の將來性、さらに東北、中部、四國、九州山地にみる焼畑、田作り、有畜農業一般、さては北海道の酪農經營に至るまで現行日本各地の具體的事實を例證し乍ら敘述し、また第六章の著者の平素の研究を要